ウィーンのまちとドナウ川の水辺

兵庫県土木部砂防課 防災係長
（前研究第二部 主任研究員） 森田 伸二

平成４年６月にオーストリアの首都、「芸術と音楽の都」と呼ばれるウィーンの街とその水辺を視察する機会に恵まれた。その概要と見聞したことについて報告する。

ウィーンのまち

ウィーンは、オーストリア東部のドナウ川上流右岸に位置する首都で、古来、南ドイツからハンガリーへ向かう道とボヘミアからイタリアへ向かう道が交差する交通の要衝として繁栄し、中世以降は全ヨーロッパに影響を及ぼしたハプスブルグ家の王都となっていたため、ハプスブルグ家ゆかりの地が街中の至るところにある。

また、東西冷戦の時代には多くのスパイが活躍する東西両陣営の駆け引きの舞台となっており、映画「第三の男」の舞台としても有名である。

現在は、東西冷戦も終結して静けさを取り戻し、新しく国連の事務所も開設され、国連都市として発展している。

写真①は、プラター公園の大観覧車からみたウィーン市街地である。テレージャイエローの建物が目立つが、市民公園や王宮の庭園等の緑が適度にあり、所々にバロック様式の教会の尖塔がアクセントになって、全体として非常に落ち着いた感じがする。

ウィーンでの滞在は、日曜日と精霊降臨祭にあたる祝日のせいもあってか、人影も少なく、街並みが一層美しく感じられた。また、19世紀に取り壊された城壁の跡に造られたリンク通りが旧市内を取り囲む環状道路となっており、その道路沿いに国立美術館や国会議事堂等のモニュメンタルな建物が随所に配置されており、文化の豊かさが感じ取れる。

写真① ウィーン市街地

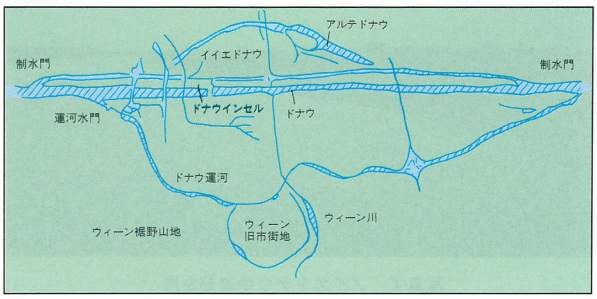
ドナウ川の水辺

ドナウ川は、その源をドイツ南部のアルプスに発し、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、旧ユーゴスラビア、ルーマニアを経て黒海に注いでいる。また、支川が多くスイスやチェコスロバキアにも通じており、これらの国の水上交通に利用されている。実際に、ウィーンの上流300kmまでは1000トン級の船舶の航行が可能だそうである。

ドナウ川の全長は約2,860km、日本列島の２倍以上で、流域面積は817,000km²で、これまた日本の面積の２倍以上である。このように比較してみると、ドナウ川がボルガ川に次ぐヨーロッパ第二の大河川であることが理解できる。この大河川の300kmがオーストリア国内を流れている。（図①参照）

図① ドナウ川

写真② アルテドナウ



図② ウィーン付近のドナウ川の概要

ヨハン・シュトラウスが『美しき青きドナウ』を作曲した1867年頃のウィーンにおけるドナウ川は、幅５kmにわ

たって３つの流れに大きく分かれ、そこからさらに、たくさんの小さな流れが網目状に広がっており、その間に鬱蒼とした緑に覆われた中洲が広がる自然豊かな流れであったが、昔から融雪期の洪水には、しばしば悩まされ続けていたそうである。その氾濫源も現在は写真②に示すとおり、かってのおもかげを残しているが、今はノイエドナウの左岸堤内にあり市民のレジャー用地となっている。

19世紀中頃のウィーンは、皇帝フランツ・ヨーゼフの命により中世以来のまちを取り囲む城壁を除去するなど大規模な都市改造が行われていた。そうした中で、エジプトのスエズ運河完成の報が伝えられ、ウィーンでは早速その技術を導入してドナウ川をショートカットする改修計画が立てられたのである。この計画により11,700m³／Sの計画高水流量に対応が可能となったが、その後10,500m³／Sに達する洪水が発生したため、計画高水流量を14,000m³／Sに見直し、新放水路（ノイエドナウ）を本川と平行に掘削する現在の治水計画が立てられた。（図②参照）

しかし、ノイエドナウの掘削によりドナウ川の川幅が約１kmになることから、ウィーン市内が分断され、橋梁の建設も困難となるため、本川の間に掘削土を用い人工島（ドナウインセル）を築造したのである。

写真③　ドナウインセル

写真④　ノイエドナウ中流部左岸

現在のドナウインセルは、写真③に示すように親水性に重点をおいた整備がされている。その中でも上下流部は、出来るだけ自然を残す配慮がなされていた。

現在のドナウ川は、過去の自然を破壊してきた計画に対する反省から多自然型護岸が採用されており、写真④に示すように、水際は捨石護岸が施工され、部分的に階段護岸があり、親水性の中にも生物への配慮が伺える。

写真⑤　ノイエドナウ中流部

写真⑥　列車の窓からみた山間の村
小さな船つき場と水辺林が美しい

写真⑤は、ノイエドナウ中流部で左岸の堤防や高水敷は手入れが行き届き、水面も上下流の堰で締め切ることにより遊水地化し、絶好のレクリエーション空間となっている

このように、ドナウ川は、海を持たない国において貴重な水辺である河川と自然環境をうまく調和させた、言わば人が自然を創生させた河川であると言える。

あいにく私が訪れた日は天気が悪く、ドナウを訪れる人は少なかったが、都市の真ん中にこんなに素晴らしい河川空間をもつことの出来る恵まれた環境と、それを認めるウィーン市民の社会意識の高さには感心させられた。

しかし残念であったのは、美しき青きドナウとはかけ離れ、ドナウ川の水は、あまりきれいとは言えず褐色に濁っていたことである。

おわりに

ウィーンには３日間滞在したが、街並みの美しさや歴史的建築物に接するたびに受けた感動は今も心に残っている

また、ドナウの水辺の広さと美しさは、日本と河川事情の違いはあるものの、今後のわが国の河川環境を考える上で、おおいに学ぶべき点が多いと考える。

最後に、ウィーンからヴェネチアに向かう列車の窓からみたオーストリアの田園地帯を流れる川が非常に印象的であったので、これを紹介して終りとする。（写真⑥）